

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第176号

イザヤ 65:1

平成22年5月28日

エルサレムに近くなつたころ、都を見られたイエスは、その都のために泣いて、言われた。「おまえも、もし、この日のうちに、平和のことを知っていたのなら。しかし今は、そのことがおまえの目から隠されている。やがておまえの敵が、おまえに対して壘を築き、回りを取り巻き、四方から攻め寄せ、そしておまえとその子どもたちを地にたたきつけ、おまえの中で、一つの石もほかの石の上に積まれたままでは残されない日が、やって来る。それはおまえが、神の訪れの時を知らなかったからだ。 ルカ 19 : 41-44 【1】

彼らは、イエスに質問して言った。「先生。それでは、これらのことは、いつ起こるのでしょうか……戦争や暴動のことを聞いても、こわがってはいけません。それは、初めに必ず起こることです。だが、終わりは、すぐには来ません。」……しかし、これらのすべてのことの前には、人々はあなたがたを捕えて迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために、あなたがたを王たちや総督たちの前に引き出すでしょう。それはあなたがたのあかしする機会となります……わたしの名のために、みな者に憎まれます……しかし、エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、そのときには、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。都の中にいる人々は、そこから立ちのきなさい。いなかにいる者たちは、都にはいつてはいけません……人々は剣の刃に倒れ、捕虜となってあらゆる国に連れて行かれ、異邦人の時の終わるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。 ルカ 21 : 7-24 (下線付加) 【2】

しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。そのとき、人々はあなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。また、そのときは、人々が大ぜいつまり、互いに裏切り、憎み合います。また、にせ預言者が多く起こって、多くの人々を惑わします。不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります……この御国の福音は全世界に宣伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべき者』が、聖なる所に立つのを見たならば……ひどい苦難がある……しかし、選ばれた者のために、その日数は、少なくされます……人の子の来るのは、いなくが東から出て、西にひらめくように、ちょうどそのように来るのです…… マタイ 24 : 8-28 (下線付加) 【3】

そして、日と月と星には、前兆が現れ、地上では、諸国の民が、海と波が荒れどよめくために不安に陥って悩み、人々は……恐ろしさのあまり気を失います。天の万象が揺り動かされるからです。そのとき、人々は、人の子が力と輝かしい栄光を帯びて雲に乗って来るのを見るのです。 ルカ 21 : 25-27 【4】

新約聖書の四福音書の記述を通して私たちは、神の御計画をいろいろな角度から知り、理解し、正しく備えることができます。聖書を未来占いの手段として世俗的に利用し、解釈する偽預言者、偽教師がはびこっているこの終末末期の時代、聖書の預言を神ご自身の霊、聖霊の導きによって解釈することは必須です。

イエス・キリストは二千年前、十字架上で亡くなられた週の火曜日、ニサン月の十二日の午後、オリーブ山からエルサレムの都を見下ろされながらこの世の終わりに関する重大なメッセージを弟子たちに語られました。共観福音書(同じ視点から書かれた福音書)と呼ばれているマタイ、マルコ、ルカの三書とともに、エルサレムの宮が完全に崩壊する日、世の終わりの前兆、主の再臨についてキリストの預言を詳細に記しています。私たちの経験している時空の限界を超えたところから御計画の次第を一気に語られる神の預言では、人間史上ではときを隔てて起こることがすべて総括的に一つの出来事のように語られているので、私たちの視点からは、よく似た出来事が何度も起こることになります。このようにして、究極的には全預言がすべて成就するのです。

キリストの最後の「オリーブ山での説教」には、マタイ、マルコが置いた焦点とルカの焦点とに違いが見られます。マタイ、マルコと違い、ルカは遠未来預言に加えて、初代教会時代に起こった近未来預言にも言及しているために、すべてを同一預言とみなした人たちの間に混乱が起こっているようです。キリストが一気に語られた70CEのローマ軍によるエルサレム神殿破壊の出来事、世の終わりの前兆、ご自分の再臨の預言は、三福音書を考察すると、冒頭に引用したように【1】から【4】の順に起こることが明らかになります。ルカの福音書は、ヘブル語(旧約)聖書が預言してきたダビデの血筋の王「メシヤ」がこの地上に永遠のユダヤ人王国を樹立するために現実に来られたのに、ナザレ人イエスを自分たちのメシヤとして受け入れることを拒んだために、「神の訪れの時を知らなかった」ユダヤ人たちの上に下る裁きを明確に預言しています。キリストが十字架刑にかかれた後ほぼ四十年後に、キリストが愛された都エルサレムは神殿もろとも「一つの石もほかの石の上に積まれたままでは残されない」ほどの全壊状態に化し、それ以降、異邦人の支配下に置かれ、踏み荒らされることになった

のでした。そのことは、【1】【2】に預言されています。エルサレム崩壊に関する弟子たちの質問にキリストは「エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、そのときには、その滅亡が近づいたことを悟りなさい」と、70CE に起こる近未来預言を指示を与えて語られたのでした。実際、キリストの預言を信じ、指示に従った者たちは都エルサレムを出て山に逃れ、ローマ軍による攻撃から免れることができました。ルカが焦点を置いたこの預言は、「初めに必ず起こること」の前に起こること、すなわち、ユダヤ教徒がキリスト教徒を迫害した初代教会の時代に起こる近未来預言で、【2】に記されているように、イエスの弟子たちが宣教した時代は、キリスト者がユダヤ教の「会堂(シナゴグ)」や「宛」に引き渡され「王たちや総督たちの前に引き出(され)」迫害を受けた時代でした。

他方で、マタイとマルコはその後から終末の末期にかけて起こる「『荒らす憎むべき者』が聖なる所に立つ」出来事、すなわち、遠未来預言に言及しています。預言が語られてから二千年近くも経った今日、今か今かと待たれているのはこの預言の成就です。ルカが「初めに必ず起こること」と表現したことは、マタイ、マルコでは「産みの苦しみの始め」と表現されており、それは、ほぼ二千年前キリストがこの地上から天上に戻られた後、キリストの名を名乗る者が大勢現れ、多くの人を惑わし、戦争や戦争のうわさが広がり、民族間の市民戦争、国家間の戦争に至る所で起こり、地は地震、飢饉、疫病に見舞われ、天にも大異変が起こるということでした。これら天災、人災、信仰の惑わしが、世の終わりが来る前に必ず起こることとして語られたのです。【3】に引用したように、マタイ、マルコはこの産みの苦しみを遠未来に起こることとして詳細に語っています。世の終わりに、初代教会の時代と同じようなキリスト教徒迫害がユダヤ人によってではなく、キリストを信じない諸国民によって起こり、そのため多くが信仰から離れることが警告されています。偽預言者の惑わしによって神の掟は忘れられ、不法がはびこり、裏切り、憎しみに象徴される人間関係が蔓延し、人々の愛が冷える時代が訪れます。

この間に福音は全世界に宣べ伝えられることとなりますが、終末の末期にはちょうどエルサレムが軍隊に囲まれることが70CEのエルサレム陥落の直前のしるしとなったように、ダニエルが預言した「『荒らす憎むべき者』が聖なる所に立つ」ことがしるしとなって、神の民にとって大艱難期が訪れると、キリストは教えられたのでした。「そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような、ひどい苦難」が訪れるので、ユダヤにいる人々は山に逃げなければならないのです。逃げる日が安息日にならないように祈りなさいという指示は、警告がモーセの安息日の掟を厳守しているユダヤ教徒に向けられていることを示唆しています。そのような迫害下にあつてユダヤ人はメシヤの出現と救いを必死に求めることになるでしょう。しかし、ちまたでは「にせキリスト、にせ預言者たちが現れて、できれば選民をも惑わそうとして、大きなしるしや不思議なことをして見せ」、キリストが前もって警告されたことを無視した者たちは滅ぼされることとなります。これはちょうど70CEに、神の名が置かれたエルサレム神殿と都の不落を信じ、エルサレムに籠城したユダヤ人宗教的指導者たちが神殿もろとも焼死したと同じ滅びの訪れです。

キリストが引用された「彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物とをやめさせる。荒らす忌むべき者が翼に現われる」というダニエル書9:27の預言は、黙示録13章でさらに具体的に預言されています。ヨハネはこの「荒らす忌むべき者」を「傲慢なことを言い、けがしごとを言う口」が与えられた「獣」と表現し、「竜(サタン)」を拜むこの獣には四十二ヶ月間、すなわち、三年半の間、神を冒瀆することが許され、サタンを拜むようにと神の聖徒たちに戦いを挑むことになることと預言しています。その大きな権威のゆえに世界中の民がこの獣の支配下に置かれ、聖徒たちの中にもついにこの獣を拜む者が出てきます。ヨハネは「とりこになるべき者は、とりこにされて行く。剣で殺す者は、自分も剣で殺されなければならない。ここに聖徒の忍耐と信仰がある」と警告していますが「最後まで耐え忍ぶ者は救われます」とはキリストご自身が繰り返し語られたお言葉でした。神の民を神の御国ではなく、獣の王国に引きずり込もうとするサタンとサタンの担い手たちの力、迫害の手は強く、キリストがオリーブ山で預言されたように、「もし、その日数が少なくされなかったら、ひとりとして救われる者はない」のです。「しかし、選ばれた者たちのために、その日数は少なくされ」最後に神の御介入、救いの御手が差しのべられます。

ルカの福音書からの引用【4】を冒頭に挙げましたが、神の民を攻撃、迫害し、苦しめる敵と敵の敷いた体制に対する神の怒りを象徴する恐ろしい天変地異を、三福音書は異口同音に人間史の最後の出来事として預言しています。神以外のだれも制御することのできない、天の万象が揺り動かされるこの出来事はしかし、主を待ち望んでいる者には「人の子が力と輝かしい栄光を帯びて雲に乗って来る」喜ばしい再臨の出来事となります。甦りのキリストの栄光の顕れによって六千年にわたる人間史において神と神の民に反逆し、邪悪な体制を敷いてきたサタンとサタンの担い手たちは、この地上から一掃され、義なる王キリストが君臨される神の国の始まりです。イザヤもこの日のことを「主の日が来る。残酷な日だ。憤りと燃える怒りをもって、地を荒れすたらせ、罪人たちをそこから根絶やしにする……わたしは、その悪のために世を罰し、その罪のために悪者を罰する。不遜な者の誇りをやめさせ、横暴な者の高ぶりを低くする。わたしは……人をオフィルの金よりも少なくする……万軍の主の憤りによって……大地はその基から揺れ動く」(イザヤ13:9-13)と預言しているのです。